
しずくの花

ふじゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しずくの花

【Nコード】

N9395H

【作者名】

ふじゆ

【あらすじ】

高校生のしずくが道端で見つけた花は異世界への鍵だった…。時々確認し、作者自身文章表現に違和感があったり、改めて読むとより分かりやすい表現が思いついた場合などは本文を修正する場合があります。

プロローグ（前書き）

初心者で読みにくいところなどありますが読んで頂けると嬉しいです

プロローグ

「今回来られる方はいったいどのような名を花に付けられるのでしょうか？」

そこには白髪の老人がいた・・・

「あの方のお嬢様だぜ・・・この先世界中の連中が皆知ってるぐらい立派な名を付けるぜきつと」
と赤髪の男性が言った。

老人は立ち上がり小高い丘から街を見下ろすと「さあ始めますよ。あなたは誰に出会い、誰と共に旅をし、誰を愛するのでしょうか？」
「母親は立派な方なんだから娘も同じように期待に込めてくれるだろう？」

赤髪の男性はしばらく目を瞑り昔を懐かしむように言う・・・

「そうだと嬉しいです。旅の終わりに咲かす花・・・あの方は『刹那の花』と名を付けられましたね」

一方老人は嬉しそうに、時折何故か寂しそうにという感じがした。

「ああ、確かほんの僅かな間だけ花が咲いたからだろ？その名前を付けた理由は・・・けど俺は見てねえから今回は見逃さねえよ」

「ええ、しかしあの花はまた30年後・・・だから後15年もしたらまた咲きますよ？」老人は不思議そうに男性に告げる

男性はあきれたように「分かってねえなあ、やっぱ一番最初に咲く花だからいいんじゃないか？」

「まあ今回来る少女が咲かせてくれる花のほうが咲くのは早いでしょうしね・・・さあ見守りましょうか？新たな旅を、そして新たな花に名が付けられるその時を」

- ・ その言葉を発すると共に老人と男性はその場所から居なくなつた
- ・

1話 出会い（前書き）

読みにくい点、誤字などあればお知らせ下さい
感想待っています

1話 出会い

ある街にある私立の学校に通う少女、名を『響ひびき しずく』

17歳としては幼げな顔立ちで日本人か？と尋ねてしまうような黄色の髪、そして目がこい茶色の高校2年生である。

「あそぼ〜」「こっちだよ〜」「はやく〜」などと最近頭の中に響く高い子供のような声が彼女の悩みの種である。

今日は特に酷く朝からずっと聞こえてくる・・・

学校では授業どころではなくずっとぼ〜として、心ここにあらずという感じだった。その調子だから友人から「ついにしずくにも春が・・・」や「しずくなら大丈夫だから告白してみたら〜？」

など言われ、本人としては響く声に関して誰かに相談しても意味なしという感じでただただ友達の受け答えに苦笑いをするだけである。

しずくが友人の楓との下校の途中にそれは起こった・・・

しずくが「この花とても綺麗だね〜」

と道端に咲く花を見て言うと、楓には見えてないらしく頭にハテナマークを浮かべるだけで

「そこに花なんて咲いてないよ〜？」と言うとしずくはその花を摘もうと花に触れると、次の瞬間水の中に浮いてるような空をふわふわと飛んでいるような感じがして、いつも聞こえる高い声ではなく、老人の声で「光の少女よ旅を終え花を咲かしてください・・・」と響く。

そして「旅を終える？」と問うが老人には

聞こえているのか聞こえていないのかその質問には答えず

「さあ、始まりです。あなたが見たあの道端に咲く綺麗な花のような綺麗な花を咲かせてください」と響くと

しずくの意識がとんだ・・・

ここは地球とは全く違う世界『フィーリア』である。ここは機械というものは地球みたく発展はしていなく、その代わり魔法というものが存在していた。

そして、精霊が人を選びその人と契約して使うことができる、精霊術というものが存在する。その契約者は王族などの特別な人から農民まで精霊が選べば誰でも使うことができる。しかし精霊は世界に火、水、土、風、光の5つの種類がいて1種類につき1匹と全部が5匹しかおらず、契約すると王族なら偉大な王と

また身分が低い平民などが選ばれば王宮に呼ばれその国の王直属の部下となり王に仕えたりと、精霊に選ばれることは光栄なものとされている。

そしてひとつ例外なのが光だった。

光の精霊はフィーリアの民にはつかず、異国の旅人とししか契約は行わないと言う噂もあった。

魔術と精霊術の絶対的な違いは魔術は使えば使うほど身体に疲労が溜まり、使いすぎると休まなければ気を失う。

一方、精霊術は本人の力は全くと言っていいほど使わず、精霊が代わりに術を発動する。メリットとして、その場に精霊が存在する限り使うことができる。

しかし、デメリットもあるわけで封印の石などアイテムでその場の精霊の加護を封印すれば全く精霊術は使えず、

一番厄介なことは精霊と契約した人間は魔術が使えなくなること

である。

フィーリアの地でひとりの青年が旅をしている。年齢は18歳で家族はおらず、髪は赤。

人それぞれ好みはあるが、女性の目をひく容姿でいわゆるイケメンと分類される容姿で名は『ソル＝ラングス』という。

ソルが刹那の花といわれる木がある前でその木を見上げ「これが刹那の木か」と呟いているとき、木の中心から光が放たれた・・・少女を中心に光っていた。

少女の背中には対の白い羽があり、体は膝を抱えるようなで姿勢で光のベールに包まれていて、なんとも神秘的に空中に浮いていた。

2話 運命？それとも偶然？（前書き）

感想をお待ちしています

これからの内容の参考にしたいと思っています。

2話 運命？それとも偶然？

2話

ソルは夢を見ているような気がした。

光のベールつつまれた少女を見て「天使なのか？」と呟き、ゆっくりと少女の近くに寄ると少女を包んでいたベールはなくなり

重力に従うように落ちていく。

それを慌ててソルが少女をキャッチし、その直後少女が意識を取り戻すと

「あなた誰？」

と聞くが聞かれたソル自身全く状況が飲み込めていない

ソルは何を言っているのかも分からないほど焦り沈黙し、目は焦点が合わずただ少女をお姫様抱っこしてる状態だった。

それもそのはず少女の背中に羽があり、その後やっこの思いで発した言葉は

「ソル」

の一言だった。

そしてやっつと焦りが収まってきたのか少女に

「背中に羽が生えているがおまえは人間か？」

と聞くと少女のほうにも違和感があったらしく

「えっあつはね？せ・・・背中にはね生えてるの？」

とあたふたしながら聞き返すと

「確かに羽は生えているが・・・」と言葉を濁す。

その後

「え~~~~」

と叫び声をあげた。

「ここどこ？」 「何であたしここに居るの？」 「あたし道端の花に触ろうとしたただけなのに・・・意味わかんないよ？」

などソルに対して答えを聞かず質問ばかりしていると

「うるさい！」と一声あり。

そして「意味がわからないのはこっちだ。ここはウエストコロリアという国で俺はお前が言う『にほん』などという国は聞いたことがない。

そしてお前が空から落っこちてきたから慌てて受け止めたんだ」と少し怒り気味に答えた・・・」

「あたしの名前は響しずくで・・・え~~~~と何故か分からないんだ

けど、背中にはねがあつてね・・・それであたしは何故か空から落ちてきてそれを受け止めてくれたのがソルでした・・・」

とビクビクしながら確認するような口調で言う。

ソルが「とりあえずお前は人間か？」

と聞くと

「はい。たぶん人間だと思われそうです。・・・えーっと、・・・とりあえず顔が近いし・・・降ろしてくれませんか？」

と顔を真っ赤にしながら言った

ソルはわかった。と言いつくを降ろした。

そうしている間に自然と羽は消えていて、ソルは厄介なことに巻き込まれたなと思いつくがため息をついた。

少しづつだが少女は自分の知らない世界、いわゆる異世界に来たということが現実味を帯びてくるとアニメみたいだななど思い、

「あつ羽消えてる」

と無邪気に笑っていた。

しずくは思い出すかのようにソルに

「ここに来る前にね、旅を終わらせて花を咲かせるなんていわれたの」

と普通の人が聞くとこいつ頭がおかしいんじゃないか？ということとをさらっと言うこと

ソルはこの世界に伝わる幻（異世界の住民が新たな花を咲かせにこちらに来る）というのを聞いたことがあったので、幻は本当だったかと半分驚きとやはり厄介事だと再確認し、ひとつため息をついた……

その後

「これからお前はどうするんだ？」

と聞き

しずくがソルに対して

「えっ？そりやもちろん。旅は道連れっていうじゃん！しかも女の子がひとりで困っているのに見捨ててどっか行っちゃうわけ？」

と目をウルウルさせ両手を胸の辺りで握り締め言った。

流石にソルもあの姿をみると見捨てるはやばいと感じたらしく

「わかった……わかったから泣くな」

と言った瞬間しずくからは万遍の笑みがこぼれた。

「とりあえず、一番近い村でも2、3時間かかるが歩けるか？」

「あたしをあまく見ちゃ駄目だよ。歩くぐらいへ〜きだよ」

と元気に答え、ソルに続いて村に向かった。

村はあまり広いと言えるものではなく、家がぼつりぼつりと20件ほどあり

それぞれの家に田畑があるらしく、見た限り田畑が村全体の6割あつた。

村の近くには川が流れていて、その川で洗濯をする住民もちらほら居た。

そしてしずくたちは宿屋を見つけると、これからも旅は続けなければならぬので、それを考えると贅沢など出来ないと一部屋しか借りず、部屋に入るなりソルに対し、しずくが顔を赤くし俯きながら

「女の子と一緒にだからって一日目から襲っちゃだめだよ・・・」

などと呟くのでソルが顔を真っ赤にし

「そ、そんなことするか〜」

と叫んだ。ソルの扱いが少々慣れてきた？しずくであった。

勿論その後ソルに

しずくは「ごめん。さっきの冗談だから」と笑いながら謝つたのは言つまでもない・・・

2話 運命？それとも偶然？（後書き）

ふじゅです。

読んでいただいております。

書くための時間が充分取れ、必死に執筆してるとは言えストックが減りつつある今日この頃です

ノリで書き始めた小説ですが、いざ書いてみると頭に思い浮かべたよう文章に表現出来ずに国語力のなさを痛感しています。

とりあえずひとつ書き終えて読み直しながら編集すると中身が結構変わってしまったところがちらほらと・・・

(・・;))

自己満足の部分もありますが、何とか皆様にも自分が思っていることが伝わるようがんばりますので、これからもどうぞお付き合いください

3話 魔術と精霊術

3話

ソルは風の魔術を得意とする。

精霊と同じように魔術にも種類があり、火、水、木、風と、光の魔術はないがそれ以外は精霊術とおなじ種類がある。

魔術者は得意、不得意はあるものの基本的に学べばすべての属性を使うことが出来る。

しかし、十人十色でひとつの種類に特化しその他は初級の魔術しか使えない術者もいれば、

得意なもの是他に比べ少々高いだけだが、それ以外は平均的なレベルまで達するという術者もいた。

ソル後者で風に関しては中級（敵を気絶させる程度）でその他は初級（殺傷になるほどの）はどなく、数打たなければ意味がない程度の術者だった。

しずくの前でソルが手のひらに野球ボールサイズの火を出し

「これが魔術だ」

と言つと

しずくは

「おゝまさにファンタジーだよ〜」
と関心していた。

ソルがその言葉に反応し「ふぁんたじー？」
と聞きなれない言葉を口にする

「えっと・・・あたしの世界では魔術なんていうものはなくて、この世界みたいな魔術なんかが使える世界みたいなのをあたし達はそういうの。楓たちにも見せたいなあ見たらきつと驚くのに」

としずくは答えると、ソルは若干分かってなさそうな顔をしてるが適当に解釈したのだろう

「魔術がないとは不便だな。まあ、分かった」と相槌をうつた。

さつき羽の羽に対し

「あのさつき背中にあった羽は魔術じゃないだろ？今まで旅をしてきて見たことなかったんだがもしかして光の精霊術と言うものなのか？」

と聞かれ「精霊術？」

と言うのでこの世界の精霊術についてソルは自分の知っていることを話すと

「うーん。そう言われても羽は勝手に付いてて、勝手に消えちゃったんだよねえ。だから精霊術かどうかってのはちよつと・・・」

と自分でもどうして背中にあったのか分かってないように答えた。

自分が精霊使いではないので詳しくは知らんがもし精霊と契約しているなら精霊に頼んでみたらどうだ？

と少々難しい顔をしながら聞くので
しずくは心の中で

「精霊さん。精霊さん。背中に羽を・・・」

と思うとその願いにここに来るまで幾度と聞いた声で

「やっと来てくれた〜」 「羽？いいよお」 「光の加護でお
姉ちゃん守るね〜」

などと聞こえしずくの体の周りが急に光だし、

昼のときみたく背中に見事な羽が存在し

本人はぶかぶかと空中に浮いていた。

それを見てソルが

「確かに光の加護が・・・」
と呟いていた。

光の加護の方法も分かり
その後ソルから

「いつも羽を出しておくのは周りが見ると光の精霊使いで、
嫌われたり捕まって牢に入れられることはないが
王宮に呼ばれ面倒事が増えるから

周りに人の居ないところで羽は出すなら出せ」

と注意されたが聞いているのか聞いていないのかしずくは

「ぶつかぶつか〜浮いてる〜これ便利〜」

なんて言いながらにこにこして

ソルの周りを回っているの、いい加減鬱陶しくなり

両肩を掴んで固定し、「真面目に人の話を聞け」と本人はもう疲れたという表情で言うまでもない。

そして空中遊泳しながらもソルに体の向きを変え

「ソルは何で旅してるの？」と聞いた。

ソルは

「幼い頃に見た本の影響で世界を自分の目で見て回っている」と

そして

「知り合いに頼まれた探し物を探している」

と答えた。

「探し物？」と尋ねると

「ああ、探し物は見たらすぐにそれだとわかるものだけ言われた」

と曖昧な感じに言った

「ふーん。なんかよくわかんないや」

「じゃあ聞くがしずくの旅というのはどうゆうものなんだ？」
驚いたようにしずくが

「えっ？知らないよ。だって旅を終わらせて花を咲かせるとしか言われてないもん」

「また難儀な注文だなおい・・・何をすればいいのかわからなければ終わりようがないぞ」

「だ、か、ら、その旅の目的が分かるまでソルの探し物手伝ってあげる」と笑うと

まったく暢気なのは性格のせいか、ただ強く振舞っているだけか・・・と呆れたとも感心したとも言いがたい表情を浮かべるソルだった。

その後「ちょっと食べ物買いに出かけてくるからおとなしくしてろ」と言ってお出て行く

しずくはひとり精霊と会話？に時間を費やした。

そしてその会話からわかったことは光の精霊術と言うのは大まかに自分や対象物を守るためのもの、他の精霊と心を通わせその力を借りること

など他にも言われたが・・・大まかにでも意味がわかったのはそのふたつぐらいで後のことはその能力を使うことがきた時に追々分かればいいと理解するのを諦め、光の精霊たちが自分の近くを嬉しそうに飛びまわる風景を見てこの子たちかわいい／＼なんて思いながらソルの帰りを待った。

帰ってきたソルを見てしずくは大きく目を見開いた。

この土地特産の果物を両腕でもうこれ以上は持てないといったぐらい抱えていたからだ。

どうしたの？尋ねると「最初は買って回っていたのだが、そうしてるうちに村人たちがくれた」と一部省いて説明した。

それを知ってか知らずにかやつぱどこの世界でもイケメンは得ずるんだね〜なんて思いながら地球で言うりんごみたいな果物を受け取り一口かじった。

「うん、おいしい。これ桃みたいな味する」

と言つと

「もも？それはタトンの実というんだ。この地方では特産物でこの時期によく取れる実なんだ」と説明した

他にも

「これは？」 「こつちの黄色のやつは？」 「このあたし

達の世界のみかんみたいな味するのは？」

など聞き、あれやこれやといつまで続くんだ？という質問にソルは面倒がらずひとつひとつ答えていった。

そうしてるうち、ひとり旅も気楽で良かったが人と一緒に旅をするのもたまには悪くはないと思っていた。

3話 魔術と精霊術（後書き）

魔術と精霊術の何が違う？

書いてる本人自身どう区別つけるか悩んでいます。

ちよつと区別つけた気ですがまだまだ同じようなものに思えてきませんね。

さてさて、花と題つけてるのに本文に花なんて出てきてませんね。

（＾．＾；）

これから出来るだけ題に見合った文にしたいと思います。まだまだ駄文ですがよかったらこれからもお付き合い下さい。

ふじゆでした

追加です

読んでくれている皆様ありがとうございます。

土、日と更新できる自信がないので、月曜は必ず更新するのでよろしく願います。

4話 石の街 アイロタージュ

早朝ソルはしずくを起こさないよう部屋を出て村から少し離れた広場で魔術の練習をしていた。

これは旅立つ以前もしていたことで、言わばソルにとっては朝の恒例行事となっていた。

まず得意の風を操り、自分の周りに風を発生させ自分を中心に渦を巻くように風を操る。

そしてその風の密度を高め、飛ばせば風の刃になるであろうその風を全身から腕へ意識を集中する。

そうすると風は両腕にまとわり付くように腕だけに集まる。集めた風を今度は腕から先へ、そしてその刃を飛ばすようなイメージを持ち

「ウィンドカッター」と言葉を発すると共に一気に飛んでいく。

初め全身を覆っていた風はその後腕に集中し、二つの刃となり体から離れ一直線に飛んでゆく。そしてその刃のひとつが先にあった石当たると石は瞬時に細切れになり小さな石の集まりとなる。もう一方は地面に直撃し地面を数センチえぐった。

「一息つくともやはりまだ思いのままに操るのは無理か」と呟く・

いくら得意種の魔術とはいえ18の青年が中級の魔術を思いのまま操るのはなかなか難しい。

しかし今までも旅をし、生きてきただけのことはあるだろう。

魔術の使える者の半分ぐらいは生活に必要な初級レベル止まりで

センスのある者では一般的には20歳ぐらいで中級を出し20後半で思いのまま操ればそれなりの魔術師と言える。

魔術の使えない者でも所謂マジックアイテムと言われる、術者が加工したアイテムを買ったり自然に存在する魔術が付加されている物を見つけてきて補ったりしている。

しかし、生活するのに完全に魔術が必要かといわれると否で、なくても生活は出来るため、人々は一部軍人などを除き魔術は補助程度という考えが住民に浸透している。

そして中級レベルを扱えるようになると普通は国の護衛団（軍人）に入っており、さらに上を目指し日々自分のレベル向上を目標に鍛錬したり、時に国のため戦地に向かったりする。

そしてその中で特にセンスが良かったり、日々過酷に訓練を行い、中級を極めた者が上級といえる言わばこの世界でトップクラスの魔術が使用出来るようになる。

それはほんの一握りで使える者は部隊長になったりしている。

それを18歳の青年がまだ操りきれていないが、何とか扱える程度まで完成度を上げたのはソルのセンスと日々の努力の賜物なのだろう。

そうしているうちに次は炎を昨日しずくに見せたように右の掌に出す。

ソルはもつと強く燃える炎をイメージし、その炎が時間と共に勢いを増す。

そしてそれは生きてるかの如く強くなり、ソルの右手を飲み込む。その後イメージが付いたのかソルは右手を前に左手を右腕に添え、右掌開き対象物に向けるそして「ファイヤ」の言葉と共にその炎が飛んでゆく。

その速度は風の刃ほどのスピードではなく、まだ目で追えるスピードだった。

直後対象物の落ち葉は炎に包まれ、灰となり消えた・・・
「炎の感じはよし・・・じゃあこれは」と言つと

今度は胸辺りで地面と平行に腕を伸ばし手を交差させる。

ソルは心の中で両手に炎がありそれが交わるようイメージする。そうしてるうちに交差した掌には魔力が集中するのがわかる。

「フレイム」と言い掌から片手のときの2〜3倍程度の炎が少し円を描くように飛んでいく。

そして地面に当たり、さらに勢いをつけ、まさに可燃物を燃やしているのか？と言うぐらいの勢いになり数秒後炎は燃やすものになくなったかのように消えた・・・

「やっと出来た・・・」ソルに笑みが生まれる。

「けど、まだ一直線には飛んでくれないか・・・」

いや初めて成功したんだ。まだまだこれからだ。練習あるのみ」

とひとり意気込む。

初めて成功したのが嬉しかったのかその後も炎を操る練習を続け、手ごたえを感じたのかそこで朝の練習を止め、宿屋に戻った・・・

「どこ行ってたの？」

「ああ、ちょっとなあ」と言葉を濁す。

「まあいいや、朝ごはんたべよつか？」

「ああ」といい昨日もらった果物のい余りをふたりで食べた。

しずくの服装は現在ソルが羽織っていたローブを借りているがその中は高校の学生服である

そのせいで必要以上に外に出れなかった。

「街に着いたら服買ってやるからもう少しそれで我慢してくれよ。

そしたら飯もちゃんとしたところ連れて行ってやるから」

流石に学生服で外を歩くと目立つため、食事も果物だけだった。

そして早々に宿屋をでて街へと急いでいた。

「ねえ後どのくらいで着くの？」

「3時間程度かな」

ついで言つとここまで約2時間ほど歩いている。

そして後半分といったところだった。

油断していた訳ではないが、周りをウルフといわれる野獣に囲まれてしまった。

ウルフというと単体では初級の魔術で十分相手できる。

しかし今回は6匹だった・・・確かにウルフは単体ではほとんど

居ない。

群れて狩りをする野獣だ。しかしほとんどは三匹一チームで一匹が囿として敵をう油断させ、

残りのウルフで相手の背中をとる方法だった・・・

今回はウルフの相手がソルだったとしても、しずくを守りながら6匹のウルフでは分が悪い

かと言って諦めるわけでもなく、得意の風の魔術で致命傷とはいかずとも確実にダメージは与えていた。

ファイヤがウルフに直撃し、怯んだ隙を見逃さず、他を警戒しながらも怯んだ一匹を集中して攻撃していた。

ついに陣形が崩れ、逃げる間隔が出来たのでしずくの手を取り「こつちだ」と空いた隙間に走った。

足かせ程度にはなるだろうと土の魔術でウルフの足場を狙い障害物となる土砂を出現させ足止めをしながら走った。

そして、やっとのことでウルフから逃げ切り

「はあ、はあ、やっと逃げ切ったね・・・」

「ああ、やっとだ。6匹で狩りとは珍しかった」

「とりあえず無駄に時間消費したから歩くぞ。」と鍛えていてのかソルは涼しい顔をしながら多少ペースを落とし、

ふたりは街に向かった。

まずこの世界の国について言うと

北の大地を国とする『ノースレイム』

この国は火の精霊を守り神とし主に軍事力に力を入れ、自国のみならず他国に厄介な魔物の出現が報告され、要請があれば動いたりする

西の大地を国とする『ウエストコロリア』

この国は風の精霊を守りとし商業に力を入れている。

南の大地を国とする『サウスコースト』

この国は水の精霊を守り神とし、医療に力を入れている。そのためこの国の医療術は他国に比べ最も優れている

東の大地を国とする『イーストラークェント』

この国は土の精霊を守り神とし、農業、漁業などに力を入れている。

他にも小国がいくつがあるが、この4大国が中心となっている。

そして今しずくたちがいるのは『アイロタージュ』という街である

この街は王都ではないが、ウエストコロリアの中では比較的大きい街で

この街は鉱山がいくつか近くにあり、周りが山という地形からも宝石や鉱石などを採掘し、それらを加工し発展してきた街だ。

街は宝石を求める商人、そして採掘する作業員、露天を出して手ごろな価格で加工品を売るうとする者などで賑わいを見せている。

貴族も住んでいるが、あまり多くなく一般に平民達が住む地区のほう賑わいもみせ道行く人も多い。

貴族地区のさらに一等地にこの街を管理している貴族がいる。頭首の名を『ライル・フォーチュ・コロリア』という名から分かる通り王族の血筋の者である。

今この街は宝美祭と言われる祭りの時期である。

そのため、普通なら貴族地区もしくはその近辺で売られている宝石または色とりどりのマジックアイテムも多くはないが、平民地区にも流れる。

それらの加工品を目的とし、他の街からもたくさんの人がこの街にあつまる。

宝美祭の一番の目的は女性たちがその加工品を身につけ、加工品（主に宝石）が最も似合っている女性を選ぶことである。

無論貴族はそのコンテストには参加せず、高みの見物ではあるが平民たちにしてみればそれは街を挙げての大切な行司である。

そして女性だけではなく加工品の製作者も注目をあびる。加工品がすばらしく貴族の目に止まれば専属の加工師として安定を得られるからである。

周りをきよろきよろと慌しく見回しながら

「賑わってるね〜」と少しずつが珍しい物を見る目をしながら言う

「今は宝美祭だからな」

「宝美祭？」

「ああ、この街挙げての大きな祭りだ。最終日に女たちが宝石などを身につけ一番美しいのは誰か決める祭りだ。」

そして女が身につけた宝石を加工したやつもその加工品が貴族の目に止まれば専属の加工師として雇われるから皆必死なわけさ・・・

「

「ほほ、そりや盛り上がる訳だね」

「それより服買いに行くぞ。」

流石にこの人だからの中頭の先から足までローブで隠すのは違和感がありすぎる」

「ん」

と手ごころな服屋を見つけサイズを測り、服を買い着替えたところで、客が入ってきた。

「ラクだけど頼んだ服仕上がってる？」

「ちよつと待つてな。今取ってくるからよ」

と店の主人が服をとりに行っているときに

「お嬢さん可愛いですね。お嬢さんも宝石をつけて宝美祭参加するんですか？」

「いいえ、旅人しているので買う余裕もないので参加はちよつと・・・」と遠慮気味に言う

「じゃあうちのやつ付けて参加しませんか？今年こそは貴族様を選

ばれたくてちょうど人探してたんです」

「えっと・・・ちょっと相談してみないと・・・」と言いソルのほうを向く

ソルは「別に急ぐ旅でもねえからでたいなら出てみるよ」とOKをだす

「やった〜」と店で騒いでいるので店主が帰ってきて何事か？とラクに尋ねる

ラクは「宝美祭での勝利の女神を手に入れました」と店主に言う

店主は今までの付き合いなのかその場の雰囲気で分かったのか「そりゃよかったな。頑張れよ」とエールを送った。

ところ変わって現在ラクの宝石加工店にいる。店内にはしずくたちしか居らず、

店内は明るくその明かりに照らされているその様子はまさに自分を選びと言わんばかりに輝いている。

ラクはその中からひとつカチューシャを手に取り、それをしずくに渡した。

それはピンク色で薔薇によく似た花をモチーフにしたカチューシャだった。

その花の中心に赤色の宝石がはめ込まれていた。

しずくは頭につけ、まわりは皆頷き

「あとは衣装ですね。さっきの店に後で頼みにいきますか？」
とラクは微笑みながら言った。

4話 石の街 アイロタージュ（後書き）

ふじゅです。

とりあえず二日ぶりです

土、日が忙しすぎました・・・（；；）

昼前からバイト入り、途中休憩をはさみ家に着くと23時ちよい前に・・・さすがに二日続けては堪えませんでした^^；

つてことでこれ投稿で見事にストックゼロに

ああ、せっかく頑張って貯めてきたんですけどね。

バイト及び学校が始まり、今まで通りの投稿は困難なのでかなりスピードは落ちますが、どうか見捨てないで・・・

今回は時間の都合で、書くだけ書いてほぼ編集なしなので、おかしな点がいくつがあるかもしれせん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9395h/>

しずくの花

2010年11月8日08時46分発行